

留学に至るまでの経緯

鄭 麗嘉

こんにちは。今夏よりコーネル大学の化学・生命化学専攻に留学する鄭 麗嘉と申します。この報告書では、留学志望に至った経緯、出願プロセス、そして留学先大学を決めた理由について述べたいと思います。ぜひ、留学の意思決定や出願の参考になれば幸いです。

1. 留学志望に至った経緯

私が留学を決めたのは、家族の影響が大きいと思います。大学院で中国から日本に留学してきた両親と、高校からずっとアメリカで留学中の姉を持ち、いつかは自分も留学するのだと何となく思っていました。しかし、大学に入って部活に熱中しているうちに学部 3 年生になり、このままでいいのか不安に感じつつも、ぬるま湯のように心地よい日本でそれなりに一生懸命やっていました。それから留学する決心がついたのは、BIOMOD という研究コンテストでボストンに行った時です。コンテスト自体は Harvard で行われましたが、最後に企業の人に来て学生を勧誘するためのワークショップを行い、その中で彼が「君たちは間違いなく世界を率いていく人材になる」と言いました。それを聞いて私は、どこか申し訳ないような、恥ずかしいような気持ちになりました。自分はそう言われるに値しない人材だと思ったからです。それと同時に、それをさも当然のごとく受け入れている周りの学生たちをまぶしく思い、将来同じところに立ちたいと強く思いました。

そして英語の勉強を始めたものの、その時点では、学部卒で直接 PhD 留学するか、日本の修士を出て留学するか、まだかなり迷っていました。迷いつつも、4 年に入る前の春休み、UC バークレーのある研究室で 1 ヶ月滞在させていただけることになりました。そこで滞在先の教授に相談したところ、「PhD を取った後に日本に戻るなら、修士を取って日本でのネットワークを広げるのもいいけど、もしアメリカに残りたい気持ちがあるなら、来るのは早ければ早いほどいい。やっぱり語学のハンデはあるし、若い方が順応は早いから」と言われ、決意を固めました。結果として、卒論研究と出願準備を並行して行うのは大変だったし、卒論研究に専念した場合に得られたものを逃したかもしれません。しかし、それはそれで得るものも非常に多く、今こうして自分が大きく成長できる環境を手に入れることができたので、良かったと思います。学部後留学も修士後留学もそれぞれの利点があるので、それぞれを経験した人に話を聞きつつ、じっくり考えて決めるのが良いと思います。

2. 出願プロセス

出願準備のスケジュールとしては、以下のような感じでした。

2 月 - 3 月 : IELTS 対策 & 受験 (志望大学に IELTS を推奨しているところがあったため)

- 4月: GRE用の単語勉強開始(～10月まで毎日少しずつ)
- 4月～5月: TOEFL対策&受験
- 7月～8月: 奨学金の書類準備&応募
- 8月～10月: GRE General・GRE Chemistryをそれぞれ対策&受験
- 11月: 様々な大学のHPを回り出願先を決定、エッセイ・CVの準備、奨学金の面接
- 12月: 出願
- 1月～2月: インタビュー、結果発表

これを読んでくださっている人がこのまま参考にしないよう、いくつか反省点と改善点を加えたいと思います。

①出願先決定はもっと早いほうがいい

結局、エッセイを書く際に出願先・志望研究室を決めることになり、志望先の教授にコンタクトを取ったり、志望校を訪問したりしている余裕がありませんでした。志望校訪問できるのが一番ですが、そうでなくても志望先は夏くらいには決めているのがいいと思われます。推薦状の効力は人脈にかなり依存するので、推薦状を依頼する予定の教授に意見を仰ぐのも有効だと思います。仲の良い先生がいて直接プッシュしてもらえるかもしれないし、そこまでいなくても、知り合いの先生が書く推薦状は、膨大な量のアプリケーションの中からあなたを見つけるのを助けます(Google 翻訳風)。

②インタビューの準備は大事

何校かとSkypeでインタビューをしたのですが、最初の数回は特に、自信を持って堂々と話せることができませんでした。ひとえに練習不足だと思います。研究の議論を流暢にできる英語力があればそれは理想ですが、たとえ付け焼き刃でもいいから、インタビューで英語力があると思わせることは大事だと思います。アメリカの研究室は協力体制なので、例えどんなに天才でも、話せなければ何も伝わりません。また、Skypeを通してのインタビューは対面してのものと感じが違うので(相手と目を合わせられない、時間差があるから相槌を入れにくい、等)、過剰なくらい練習を繰り返しても損はないです。

3. 留学先決定の理由

最終的には第一志望だった UC Berkeley/Bioengineering から、Direct Admission(入学した場合の所属ラボが決まった状態)でオファーをいただきました。しかし、卒論発表の都合でvisiting weekendに参加できなかったため、後日に個人でアポを取って見学に行くことにしました。とはいえ、せっかくの機会なのでアメリカのvisiting weekendを体験してみたく、他にもオファーをくれた Cornell University/Chemistry and Chemical Biology のvisiting weekendに参加することにしました。おまけ気分に参加したその訪問ですっかり Cornell に惚れてしまい、今こうしてここにいます。なぜ突然、あまり興味のなかった学校が魅力的になったのか、Cornellを好きになったポイントを次ページにまとめます。

- ① 学生支援、特に留学生に対する支援が充実していた(制度、環境、雰囲気など)。
- ② 夏に3週間 TA 養成プログラムを実施しているなど、TA としてのしっかりしたトレーニングを受けられることが、アカデミアを目指す自分には魅力的だった。
- ③ 教授たちと直接話してみると、自分の興味に合う研究が意外にも沢山あることが分かった。
- ④ Berkeley と悩んでいる自分に、特待生扱いの奨学金を提示してくれて、そこまでしてリクルートしてくれるのが普通に嬉しかった。

とはいえ、UC Berkeley も著名な教授陣・優秀な学生・温暖な気候など魅力的で、決定の締め切り(4/15)直前まで悩んでいました。特に、UC Berkeley の BioE は UCSF との共同プログラムですが、一方の Cornell は丘の上にあり、どのくらい Collaborative な環境にあるのか疑問でした。その疑問を Cornell の 2 人の PI にそれぞれメールでぶつけたところ、2 人ともから 1 日足らずで Word ファイル 2 枚分にも相当する返事がきて、その熱意に感動しました。メールの内容も納得がいくもので、それが最後の後押しとなり、Cornell に決定しました。

留学先決定で悩んでいた時に励まされたのが、様々な人から「間違った選択はない」と言ってもらえたことでした。どちらも十分良い学校なので、あとは自分の好み次第だと。世界トップのプログラムなら周りの人から多くの刺激を受けられるかもしれないし、面倒見の良いプログラムだから得られるものもあると思います。どちらを選んでも異なる方向に成長できると思うからこそ、選ばなかった方を名残惜しく思う気持ちは常にありますが、結果的には自分がよりのびのびと成長できそうな場所を選べたと思います。

本報告書を読んでくださり、ありがとうございました。こんな行動と決断をした人が、今なかなか幸せにやっているひとつの体験談ということで、皆さんの参考になれば幸いです。

最後に、留学を支えてくれた家族、金銭面に限らず様々な面でサポートしてくださった船井財団の方々、推薦状を快く書いてくださった先生方、留学準備と学部研究の両方でいつも助けてくださった研究室の方々、大変親身に相談に応じてくださった船井奨学金の先輩方、その他お世話になった全ての方々に、心より御礼を申し上げます。